〔信長公記十五〕天正十年六月二日、○二日、大閤記作二四日一、恐非　明智日向、○光秀、中略、其日京より、直に勢田へ打越、山岡美作、山岡對馬、兄弟人質出し、明智と同心仕候へと申候之處、信長公之御厚恩不淺忝之間、申同心申間敷之由候て、勢田の橋を燒落、山岡兄弟居城に火を懸、山中へ引退候、爰に而手を失ひ、勢田之橋づめに足がゝりを拵、人數入置、明智日向坂本へ打歸候、○又見二太閤記一

〔遊囊賸記十九〕勢多橋、織田軍記ニ據レバ、天正三年掛ラレシハ、廣四間、長百八十間ナリ、國初ノ諸記ニ據レバ、何レモ小橋三十六間、大橋九十六間、今ノ間數ト符合ス、昔ハ今ノ處ヨリ南ノ方ニカカリテ、一條ノ長橋ナリケリトイフ、中島十五間ヲカタドリテ、大小二條トナルコトハ、天正以後ト知ベシ、○中略　此橋ハ志賀、栗田兩郡ノ界ナリ、

〔丙辰紀行〕勢田

勢田は古戰場なり、承久の役には皇輿の敗績して、外に蒙塵ありしことをかなしみ、孝謙の御宇には內相が奔らんとするに橋絕て、高島にて亡し事をよろこぶ、是のみならず、日本紀を見れば、天智帝崩御、○中略　大弟○天武　吉野より、潛に出て、○中略　皇子○弘文　の兵と戰勝て、近江の瀨田まで責のぼり給ふ、皇子みづから此橋の邊に陣をとつて合戰ありしが、大弟の兵かつにのりて、皇子敗北して、竹中に入て伯林雉經の跡をふめり、大弟は清見原天皇是なり、壬申の亂とは此時の事をいふなり、○中略

勝敗興亡憂更憂、千年人事落二棊楸一、積骸爲レ橋血爲レ水、都入二勢多橋下流一、

〔東海道名所記五〕勢田の大橋九十六けんに、小橋のながさ三十六間なり、○中略　古しへより東國の軍兵の都にせめのぼるをふせぐには、かならず宇治と勢田との橋を引て相まつとは申せど、前陣して渡しける事もたび〳〵なりとかや、

〔垂加草四〕再遊紀行